

< 2017年 10月 >

古賀 順子

「パリ造幣局」

パリ 6区ケ・コンティ 11番地。2009年から長い間続いていたパリ造幣局のリノベーション工事がようやく終わりました。「コンティ 11 美術館」の名前で、9月 30 日から貨幣(コイン)の製造法や歴史を紹介する文化活動の場としてリニューアルしました。

貨幣をモチーフにした「ボン・ヌフ」(メトロ 7 号線)のホームを出て、ボン・ヌフ橋を渡ります。アンリ 4 世騎馬像を見ながら左岸に入り、右手に見える新古典主義の四角い整然とした建物がパリ造幣局です。

パリ造幣局の歴史は、864年 6月 25日、シャルル 2 世(禿頭王)(840-877)が發布した「ピートルの勅令」(ピートルはユール県にある町の名)に始まります。その後、百年戦争(1337-1453)の最中、イギリス軍の捕虜になったフランス王ジャン 2 世(善良王)(即位期間 1350-1364)の身代金を用意するために、1360年、ジャン王が騎馬に跨り剣を掲げる鎧姿の金貨(3,88g)が铸造され、1362年から 1364年まで流通します。1387年、現在の「サマリテヌ百貨店」の場所にパリ造幣局のアトリエが建立。1514年、ルイ 12 世(1462-1515)は、自分の肖像画(横顔)を刻んだ銀貨を発行。そして、1551年、フランソワ 1 世の息子アンリ 2 世(即位期間 1547-1559)が、アウグスブルク(ドイツ)から貨幣铸造機の特許を買い取り、铸造技術が一挙に進歩し、丸い形の整った均一のコインを多量に製造できるようになります。

1607年、アンリ 4 世統治下、ボン・ヌフ橋の工事が完了し、造幣局はルーブル宮内に移り、アンリ 4 世の後を継いだ息子ルイ 13 世(1601-1643)は、貨幣改革を行い、1641年自画像を刻んだ「ルイ金貨」が誕生します。

ルイ 13 世、ルイ 14 世統治下で貨幣を芸術作品に高めたのが、リエージュ生まれのジャン・ヴァラン(1607-1672)です。造幣局の権利を買い取り、リシュリ

ューの後ろ盾を得て、1630年代から貨幣やメダルのモチーフをデザインし、1647年にはフランスの造幣局の監督を行い、図柄を決定する地位にまで登り詰め、1650年フランスに帰化します。ジャン・ヴァランは、ミケランジェロの再来と賞賛されたイタリア人彫刻家ベルニーニ(1598-1680)に並び評された彫刻家でもあり、幼年期のルイ 14 世を刻んだ貨幣を製造しています。

1775年、コンティ河岸にパリ造幣局が移転し、現在に至っています。ナポレオン金貨、ナポレオン 3 世の自画像を図柄にした金貨など、貨幣は歴代フランス王の顔でもありました。1840年からは、铸造機はプレス機へと変わり、今もなお硬貨を製造し続けています。今日、コンティ河岸のパリ造幣局では記念コイン、勲章、メダル铸造が中心で、2002年 1月 1日から流通している「ユーロ」コインの製造は、1973年からボルドー近くのペサックにある「パリ造幣局・ペサック铸造アトリエ」で行なわれています。

流通貨幣ユーロを铸造しないコンティ河岸の役割は、フランス貨幣の精神を象徴することだと言えます。貨幣の歴史は、錬金術、合金術、铸造技術だけでなく、彫刻、芸術、政治、社会と重なります。その精神を今日のパリで具体化すべく、パリ造幣局の中庭には、金属製のオブジェやニキ・ド・サンファルの彫刻が置かれ、ファッション・デザイナーのジャン＝ポール・ゴルチエとのコラボレーション・コインを販売しています。「東京国際コイン・コンベンション」(2015年)に向けては、「星の王子様」記念ユーロ・ミントセット」(2・1ユーロは「木」の図柄。50・20・10セントは「種を蒔く女性」。5・2・1セントは「マリアンヌ」)を造っています。さらには、建物内にミシュラン 3 つ星レストラン「ギー・サヴォワ」(パリに複数ある中の一店舗)があります。料理も含めたフランス芸術全体を取り込みたい姿勢です。インターネット社会が進み、「ビットコイン」など「仮想通貨」が出現している今日ですが、金貨・銀貨、メダルや記念コインなど、有形の通貨への愛着は簡単には消えないだろうと思います。